

クマちゃんをたすけろ

<http://syougakujuukenmama.cocolog-nifty.com/blog/>



複写・複製・無断配布を禁止いたします

さきちゃんは、小学一年生です。

今日は、金曜日。さきちゃんの大好きなテレビのばんぐみがある日です。だから、さきちゃんは、あわてて学校からかえってきたのでした。

「お母さん。ただいま。」

さきちゃんの大好きなテレビばんぐみは、夕方の五時からです。今はもう四時なので、急いでお菓子を食べて、急いでしゅくだいをしなければなりません。

今日のお菓子は、お母さんが作ってくれたドーナツです。いつもなら、ゆっくり食べてゆっくりと味わうのですが、この日はちがいます。さきちゃんは、あわててドーナツを口にに入れて、ちょっと苦しくなりました。

それをみたお母さんが

「そんなにあわてる事ないでしょう。」

と、ぎゅうにゆうをもってきてくれました。でも、さきちゃんはそのもあわててのんでしまって、こけそうになりながら、自分のおへやおかいました。

「ええっと。今日のしゅくだけは・・・」

今日のしゅくだけは、さんすうのもんだいです。たしげんが、十もんかいてあるプリントです。さきちゃんは、さんすうがとくいなので、ものすごいスピードでといいきました。

「終わった。」

時計をみると、四時五十分です。どうにか、まにあいそ

うなので、さきちゃんはとても安心しました。

さきちゃんが、しゅくだいのプリントをかたづけ、テレビのあるへやにおかおうとした時、さきちゃんの大好きな、おにんぎょうのくまちゃんが、たなから落ちているのに気がつきました。さきちゃんは、自分がおとってしまったのかなと思って、たなにもどそうとしました。その時です。

「さきちゃん。さきちゃん。どうかお願い」

なんと、くまちゃんがこっちを置いてしゃべりだしたので、

さきちゃんは、あまりにおどろいて、にげだしそうになりましたが、くまちゃんがひっしにしゃべるので、きいてあげることになりました。

「あなた、おはなしができるのね。私、ぜんぜん知らなかったわ。お願いってなあに。」

すると、くまちゃんは涙をポロポロこぼして、さきちゃ

んにいいました。

「ぼくの大事なおともだちのミミちゃんがいなくなってしまうんだ。もう二日もみあたらない。ぼくがきらいで、ミミちゃんどこかへ行ってしまったのだろうか。それとも、ぼく、何かミミちゃんのいやな事をしてしまったのだろうか。」

そういうと、くまちゃんは、「うわあ。」と、さっきよりももっと大きな声で泣き出しました。

さきちゃんは「だいじょうぶよ。泣かないで。」と、くまちゃんをだきしめてあげましたが、本当はとてもこまっていたいました。

もし、今、くまちゃんのお友達の子ミミちゃんをいっしょにさがしてあげれば、大好きなテレビのばんぐみにゼったいに間に合いません。さきちゃんは、ちよつと、あとでにしてもらおうかとも考えました。

でも、くまちゃんは、もう涙でぐちゃぐちゃです。本当

はすごくテレビが見たくて、走っていきたいのですが、くまちゃんを助けてあげる事にしました。

「くまちゃん。私がいっしょにミミちゃんをたすけてあげるから。」

そう言うと、くまちゃんは、ぱっと笑顔になりました。

「ありがとう。ありがとう。」

でも、いったいミミちゃんはどこにいるのでしょうか。

ミミちゃんとは、いつもくまちゃんのとおりにおいてあ

るうさぎのおにんぎょうです。白い肌をしていて、ピンクのとてもかわいいドレスをきている、さきちゃんも大好きなおにんぎょうです。

さきちゃんがへやをみわたすと、一枚の紙がおちているのに気がつきました。なんだろうとひろってみると、

「ミミちゃんは、ダンスの上から二だんめにいる」

とかかれています。

大変です。みみちゃんは、くまちゃんがきらいでにげだ

したのではなくて、だれかにつれさられたのかもしれない。
ん。

さきちゃんとかまちゃんは、あわててダンスにおかいました。
した。

上から二だんめは、さきちゃんのスカートがはいつてい
るところです。さきちゃんは、ゆっくりゆっくり、ダンス
のひきだしをあけてみました。

すると、また、一枚の紙がはいつていました。

「ふふふ。よくきたな。しかし、ここじゃないぞ。次
は、さきちゃんの大好きな、しかくくて、いろんなものが
うつる箱だ」

とかいてあります。

しかくくて、いろんなものがうつる箱……。しばらく
かんがえて、さきちゃんは、「そうか。」と、あわててテ
レビのほうにおかいました。しかくくて、いろんなものが
うつる箱とは、きつとテレビです。

さきちゃんが、テレビの部屋にいてみると、テレビにまた、いちまいの紙がはってありました。

「よくわかったな。次は、家のなかでいちばん冷たい箱の中だ」

とかかれています。なんだろう、これにはとってもこまっ
ってしまいました。どこだろう。どこだろう。

「それは、あれだよ。」

急に大きな声をだしたくまちゃんは、いきなりさきちゃ

んの手をひいて、かけだしました。

ついた所はどこだと思いますか。

そう、それは冷蔵庫です。

しかし、そんな所にミミちゃんが入っていたら大変です。

さきちゃんは、急いで冷蔵庫をあけてみました。

すると、中にリボンをつけた箱がありました。その箱には小さいメモがついています。

「この箱を開けずにもって、もとの、たなの所にこい」

おそろるおそろる箱をもったさきちゃんは、これが ばくだん だったらどうしようと思いました。おとさないようにおとさないように、そっと箱をもとの部屋へはこんだのでした。すると、

「おたんじょうび、おめでどう」

なんと、そこにいたのは、ミミちゃんでした。箱の中身は、なんと、くまちゃんの大好きなチョコレートケーキ。

「くまちゃん。びっくりさせてごめんね。ちょっと、し

ばらくの間、くまちゃんのプレゼントを探しにいったの。それで、ちょっとおどかせたくて。」

「ううん。ミミちゃん。よかったよかったよ。」

くまちゃんは、前よりもっと大きな声で泣くのでした。さて、ミミちゃんからのプレゼントは、とってもすてきな青いぼうしでした。

「すぐくじょうずに針しごとをするモグラさんがいてね。

その人につくってもらってたから、長く、るすにしちやて

たの。ごめんね。」

それを聞いて、くまちゃんはにっこりとほほえみました。
さきちゃんも、にっこりとほほえんで、

「くまちゃん、とってもにあってるよ。」

と、言ってあげました。

大好きなテレビのばんぐみはとっくにおわってしまっ
て見れませんでした。さきちゃんは、くまちゃんを助けて
あげて、本当によかったと心から思うのでした。

そして、その後のみんなでお誕生日ケーキは今
まで食べた中で一番おいしいと思いました。